抹消

作　広田淳一

【表記について】

【★】 黒星。前の人物の台詞の語尾に重ねて言う。 ※いわゆる食い気味。

【☆】 白星。近くにある同じ数のこの印の付いた台詞が同時に発話される。意味上は無関係。
※舞台上に複数の会話が存在する場面で使用する。「同時」の厳密性には拘らない。

【／】 スラッシュ。台詞中で使用される。間髪入れずに台詞の調子・方向性を切り替える。

【＝】 イコール。
【使用1】語尾に「＝」が付き、続く行の語頭に「＝」が付く場合、間髪入れずに次の台詞が始まる。
【使用2】語尾に「＝」が付き、行（他者の台詞）をまたいで語頭に「＝」が付く場合、それらは連続した発言である。 ※ある人物の台詞の間に挿入される他者の発言、あいづち等を待たずに話し続けろ、という意味。「無視せよ」という意味ではない。音声の被りが発生する。

【〔〕 大カッコ。近くにある同数のこの記号と同時のタイミングで始まり、音声が被ったまま発話される。

【▲】 黒三角。会話しながら退場する。

【△】 白三角。会話しながら登場する。

【登場人物】

冨永ミワ　……三十代中盤。シスヘテロの既婚者。一児の母。私塾の経営者。担当教科は英語。一児の母。

川島トモロー　……ミワの友人。同世代だかミワよりは年下。シスジェンダーのゲイ。個室で楽しむたこ焼き店を経営している。

片桐コウジ　……塾講師。同じ塾で働く講師。担当教科は「人権・道徳」（フェミニズム）。兄がいた。

【登場しないが、言及される人物】

木村ナオキ　……塾講師。担当教科は世界史。

古川（こがわ）ハル　……女生徒。高校二年生。

【1】発火点

○順を追って　トモローの語り　その1

開演前。
舞台上に椅子がいくつか置いてある。

開演。
トモロー、トイレのある方向から登場。
トモローは三十代前半の男性で、スーツスタイルではない服装。ファッションにはそれなりのこだわりを持っている様子で身綺麗にしている。
手を洗った直後の様子で、シャツを腕まくりしており、ハンカチで手を拭いている。

トモ　（観客に）いやいやいやいや、ねえ。もう、ホントに。どうしようかな、っていうね。どうしたもんかな、っていう状況になってしまっているわけなんですけど。（服の袖口を見て）うーわ、ビシャビシャだもう。やあ、大変だなこりゃ、ホント。どうっすかな。

一拍。

トモ　はい。というわけで、そろそろ始めたいと思うんですが――。毎度のことで恐縮ではございますが、えー、携帯電話、時計のアラームなど音の出る機器の電源はお切りになるか、音の出ない状態にしておいてくださいますようお願いいたします。また、上演中もあの、マスクの方は外さずに、ね。こう、付けておいていただけますようお願いいたします。一応、上演中もずっと冷房は入れておこうと思うんですけど、換気を結構しっかりしておりますんで、暑い、寒い、じめじめする、パサパサする、もちもちする、ポヨポヨする、など・あるかとは思うんですが、ご気分悪くなられたりしたら手を上げていただきまして、えー、そういたしますと係の者がこう、ね。対処させていただきますので。――非常の際は、係の者が誘導いたしますので、どうかお席についてそのままお待ちくださいますようお願い申し上げます。

などなど。

トモ　――（観客に）えーとね。そうなの。あの、――とっ散らかった話ですよ、これ。ね。覚悟してください。そんなね、――すっきりしない。いや、あの、整理してね、そう、俺も整理して話ができるんだったらそうしたいなとは思っているんだけど、いやしかし、どうもね――。

トモロー、突然黙る。
しばし無言でキョロキョロと周囲を見渡す。何かを警戒しているようでもある。

間。

トモ　そんなつもり無かったんですよ、俺だって。そんなつもりはね、まさか全然／いやいやいや、違う、そうじゃなくて。――順を追って、ね。せめて順を追っていきましょうか。がんばるます。――えーとね、えーと、

一拍。

トモ　だからそう、だから、その日は急に呼び出されて。この、会議室に。あの、友達のミワ／あー、冨永ミワっていうのがいたんだけどね、昔からの腐れ縁ていうか、親友みたいな感じのやつで、そいつに、急に呼び出されちゃって。（電話の身振り）すっごい緊張したような声で、どうしても話したいことがあるからー、なんていうもんで、どうしたどうした、なんていって。

ミワ、登場。

ミワは三十代前半の女性。スーツ、とまではいかないにせよ、かなりフォーマルな部類の服装。洗練された格好で金銭的にもある程度余裕があるように見える。

トモロー、ミワを見る。

ミワは以下のトモローの台詞の間に椅子や机を動かし場を整える。

トモ　――三十、――ちょっと過ぎぐらいかな。まあ、これがなかなかやり手のなに？　キャリア・ウーマンていうんですかね。塾の経営をしてたんだけど、そう、そうなの。こないだ赤ちゃんを産んで。やあ、――ね。そうなんですよ。こないだね、――ついに。ようやくですよ。だってもう、長いこと不妊治療みたいなことをしてて？　もう、ちょっとキビしいかこれは、なんて言ってたんですけどついに。男の子を産んで。ホント元気なね、いや、俺は写真でしか見せてもらって無いんだけど、ホントかわいくて。あ、名前がね、茜丸っていうんだって。――なんだそれって。――茜丸。なんか、本人がどうしても茜丸がいい、っていうんでそうなったらしいんだけど。「丸」いらねーだろ、って。「茜」はいいけど「丸」いらねーだろ、なんて俺は言ったんだけど、まあでも、今、もう、ね？　なんでもアリみたいになってっからね名前なんて。いいと思うんだけど、かわいけりゃ。いや違う、こういうことじゃなくて違う違う。そうだから、――呼び出された、って話しで。急に。

舞台上、少し離れた場所から、

○マズいことになった

ミワ　すぐ来てくれない、トモロー？　とにかく、マズいことになったから。

トモ　来てって、――ん？　いつの話？

ミワ　今、今、今の話。ヒマでしょ、どうせ？
トモ　いやいやいや、（観客に）こっちにも都合ってもんがあんだろう、っていってんのにあいつ、
ミワ　どうしても今晩、というか、今じゃなきゃダメなの。
トモ　（ミワに）今って言われてもそんな。
ミワ　場所は（スマホで）送っとくからさ。とにかく、ね。もう、すぐに来て。なる早で。
トモ　（観客に話しつつ、移動を始める）っていうんで、えー、なるはやてー、なんて言いながらそれでも一応来て。というか、行って。や、あいつのわがままはホント酷いんだけど、こっちも人がいいもんだからついつい断れなくて、

ふたり、会話のこのあたりで会議室で落ち合う。
トモロー、ここまでにコンビニで買い込んだものを持つ。
場面、会議室になる。

ミワ　（あまり反省していない風に）やー、ホントごめん、急にねえ。
トモ　ホントだよ。忙しいんだよ、こっちだって。
ミワ　だよねだよねー。あー、なんかそこら辺、適当に座って。あ、お茶でも淹れる？
トモ　いいよ、そんなんは。むしろちょっと買ってきたからいろいろ。
ミワ　ありがとう。（気が利くことに感動しつつ）そういうとこホント、（えらいよねー）
（トモの荷物の大きさが気になり）というか、なにそれ、重そうだね？
トモ　ああ、これはちょっと仕事の、――というか、なになに、どうしたのよ？
ミワ　もうさー。あ、聞いてくれる？
トモ　うん。聞くけど。
ミワ　や、まずはありがとう、来てくれて。ホント助かる。ラスカル。パスカル。――ジャッカル。
トモ　★早く言えよいいから。ええ、なに、こないだのアレ？　炎上したとかっていう？
ミワ　そうそう、こないだの！　炎上のアレの、んー、続編ていうか。
トモ　だってなんか、あ、あれ？　一段落ついたんじゃなかったの？
ミワ　ま、そうなんだけど。そうなんだけど、ねえー。一段落ついた、と、言うことにしたかったのあたしは。いいじゃんもう、って。こんなバカな話さ、
トモ　収まらないの、炎上？
ミワ　いやいやいや、炎上は別にもう、もともとそんな、大した炎上じゃなかったんだけど、だって・そんな、ねえ？　ちっせえ塾の話なんだからさ、むしろ内輪で、問題になっちゃって、
トモ　ああ、終わらせねーよ、みたいな？
ミワ　一部のバカがしつこくて、今。ブチギレてて。
トモ　ああ、ブチギレて――。まあ、「ちっせえ」ってことないけどな。あれでしょだって、最近は生徒さんも増えて？

ミワ　やあ、まあ、それはね。
トモ　駅前に支店も作って？
ミワ　（喜んで）そう、お陰様で。支店ってわけじゃないんだけど、
トモ　なんていうの？　分校？
ミワ　や・ともかくさ、これはもうホント・ピンチだからトモローを頼るしか無いと思って、
トモ　なにその、生徒さんがなんかされちゃって、っていうやつだよね？＝
ミワ　そうそうそう。
トモ　＝その、なんだっけ、あのー、あの、女生徒さんが、
ミワ　ああ、ハルちゃんね。古川さん。
トモ　そのなに、古川、ハルちゃん？　うん。女生徒。女生徒さんが怒っちゃってる、と。
ミワ　んー、まあ、怒ってる、ってわけじゃないと思うんだよね、本人はそんな——。いや、わかんないよ。本音ではどう思ってるかわかんないけど、少なくともあたしが直接話した時はそんな、まあ、激怒してるみたいな感じではなかったから、
トモ　じゃあ、なに、親御さんがブチギレて？
ミワ　いや、いやー、そうじゃなくて。ま、確かに親御さんが、っていう話でもあるんだけど、
トモ　うん、あるんだけど？
ミワ　むしろ親御さんはまだ、「心配」というか？　怒ってるっていうよりは、「大丈夫なんですかね？」っていう、確認というか、
トモ　ふーん、比較的冷静というか？
ミワ　冷静・冷静。まあ、とにかく心配？　懸念？　っていう。
トモ　それはまあ、ありがたいのか？　だってこういう、ねえ？　ハラスメントの問題とかだったら普通、親御さんの方が怒っちゃって、みたいな、
ミワ　いやいやいやいや、怒ってはいるんだけど、ね。まだ、信頼関係も残ってるっていうか、どうなんですかこれは、っていう。
トモ　んー、じゃあ、今後の展開次第というか。
ミワ　そうそう、そんな感じ。

間。

トモ　「ん？
ミワ　「ん？
トモ　や、——え？　じゃあ、なに？　誰がブチギレてんの？
ミワ　だから、片桐くん。
トモ　——誰？
ミワ　いたじゃんほら、覚えてない？　片桐先生。お店連れてったでしょ、お花見の帰りに。
トモ　——誰？
ミワ　んー、だから、ちょっとヒョロっとした感じのさ、

トモ　（思い出した風）ああ！　――誰？＝
ミワ　＝（ツッコむ）思い出せよ！　や・見りゃわかるって、一緒に行ったから、こないだ。
トモ　お前、いろんな人連れて店に来るからさ、
ミワ　そうだよ。感謝しなよそれは。
トモ　ありがとうそれは。
ミワ　や・だからとにかくそういう、若い先生が居るんだけどね＝
トモ　＝片桐先生。
ミワ　片桐、んー、なんだっけ下の名前、なんか、まあ、とにかく男の先生で。
トモ　それがキレてんの？
ミワ　まあ、キレてるっていうか、うん。お怒りになってるわけよ。「人権・道徳」の先生だっていうのもあって、
トモ　「人権・道徳」の先生？　ってなに？　今、そんなんあるの？
ミワ　もうずっとあるよ。受験科目でもあるし。
トモ　はー。そういう時代か。
ミワ　まあ、簡単に言っちゃえばなに、そいつが炎上の火元っていうか。着火点っていうか。
トモ　ああ、なるほどその、ネットでそのことを告発した、
ミワ　んー、まあ、ネットは大分歪んでんだけどね、あたしからしたら。でも、彼の言い分っていうか、そういう、熱い思いみたいのでいろいろ書いちゃったからそれだけ読んだ人はみんな怒っちゃって・話膨らんじゃって、
トモ　そーりゃ大変だ。
ミワ　だって、あれだけ読んだらあたしだってブチギレるような内容だもん。
トモ　でも、本人は善意でやってっからまた、ねえー（厄介だねえ）。
ミワ　そうなのホント！　そんでそいつがなんか、加害者、というか、まあ、――加害者か。うん。加害者の先生を辞めさせろ、みたいなことを言い出して。
トモ　おー、辞めさせる。
ミワ　や、でも、ある程度燃えちゃったしね。当然っちゃあ当然なんだけど。本人以外のところで結構、怒ってる人もいるわけだし、
トモ　本人以外？
ミワ　だから、他の子の保護者さんの間からもなに、意識高い人からは何件か苦情みたいなのも来てて、
トモ　ああ、そういうこと。
ミワ　それに、――怒ってないってわけじゃないと思うしね、ハルちゃんも。だって一応最初に文句言ってきたのはハルちゃんなわけだから、
トモ　「文句言ってきた」ってちょっと、
ミワ　いやいやいや、簡単に言えば。簡単にいえばね。
トモ　そんなんだから燃えちゃうんじゃないの？
ミワ　や、それは、――すみません＝
トモ　＝（冗談で）そうだ、反省しろ！

ミワ　って、ええー？　いいじゃん、いいじゃーん。（ふたりの間を示し）ここでの話なんだからそれは。今は。
トモ　いいんだけどね、全然。基本、クソ喰らえと思ってるから俺は、そういうの。
ミワ　もう、やめてー、ホント。敏感になってるから、今、すっごい、炎とかそういう、熱に対して過敏になってるから、センサー。
トモ　ごめんごめん。で、なんなのよ？
ミワ　や、だからそれで、――来るから今から。
トモ　来るから今から？
ミワ　うん。
トモ　ん、なにその、片桐くんが？
ミワ　他にいないでしょ。
トモ　ここに？
ミワ　こーこに決まってんじゃんかよ。
トモ　え・なにななに？　どういうこと・どういうこと？
ミワ　や・だから知らないけどなんか、――物申すぞ、じゃないけどさ、話があるんで、っていって呼び出されててあたしが。
トモ　呼び出されてて。うん。
ミワ　まあ、この場所を指定したのはこっちだけど、とにかく話しましょう、みたいな流れになってて。もうすぐ時間、というか過ぎてるのか。良かった。トモロー間に合って。
トモ　（立ち上がり）え、え、か、か、帰るよそしたら、
ミワ　え、なんで・なんで・［なんで・なんで・なんで？
トモ　［なんで・なんで・なんで？

間。

トモ　や、話せばいいじゃん、そしたら。ミワと、（その人で）
ミワ　不安じゃん。一人じゃ。
トモ　いやいやいや！　――関係ないでしょ、俺。
ミワ　あるよ。ある。食べにいったじゃん一回、お店。
トモ　ええ？
ミワ　常連さんでしょもう。
トモ　――それはやり口がヤクザだよー。
ミワ　★でもでもでも、関係ない人がいたほうがこういう時は丸く収まる、っていうか、それにホラ、トモロー結構お店ではタメ口店長みたいな感じでフランクにいろいろやってんじゃん？
トモ　や、キャラだよあれは。
ミワ　キャラでも！　キャラだとしてもそういうことが一応はできる、っていうかなんていうの、――そういうモードを持ってるわけじゃん？

トモ　うーん。どうすんのだって、俺がいて？
ミワ　だから、なんていうの、――いい感じにさ。まとめてほしいわけ。
トモ　まるなげ？　――え、いい感じにって言ったって、だって、
ミワ　違う違う違う、だからそんなね、揉め事を全部解決してほしいとか、そういうことじゃなくて、
トモ　できるかー、そんなこと。
ミワ　や、もちろん・もちろん、だからまるなげとかじゃなくてこう、――極端なことにならないように？　話し合いをさ、なに、ガイドしてほしいというか。
トモ　ガイド？
ミワ　「それはちょっと言いすぎじゃないですかー？」みたいな。
トモ　なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだよ。
ミワ　（あたしが）困ってるわけじゃん。助けてほしいと泣きついてるわけじゃん。
トモ　ええー。
ミワ　そんなしないじゃん、頼み事なんて？　滅多にないことよ、こんな。
トモ　や、まあ、そうかもしんないけど。
ミワ　長いつきあいじゃんかー。
トモ　そうだけど、んー、――確かに滅多にはないのかもしんないけど＝
ミワ　＝でしょ？　そんなさ、基本、てめえで解決できることはてめえでやれよって思ってるタチだから、他人にも自分にも、そういうスタンスでいるタチだから、
トモ　うん、そう、だね。
ミワ　言ってたじゃん！　ミワはもっと人を頼んなきゃダメだよ、って。もっと頼ったっていいんだよ、って。
トモ　あー、言ったな、確かに。
ミワ　「人は誰も一人では生きていけない」。「助けてほしいと言えた時、人は自立している」。「立派な大人だって、万引きしちゃう夜もある」＝
トモ　＝言ってないな最後のは＝
ミワ　＝言ってたよ！＝
トモ　＝ねーよ、そんな夜は！　ダメだろ万引きしちゃ、立派な大人は。
ミワ　おおよそ。おおよそ、そのような意味のことをね。
トモ　いやでも、だったらなんか、旦那さんに頼るとかさ、
ミワ　★無理・無理・無理・無理！　あいつは一番向いてないから。揉めちゃう＝
トモ　なんでよ？
ミワ　＝揉め事がね、もっともっと大きくなっちゃうから、あの人いたら。
トモ　んなことたあ、ないと思うけど。
ミワ　★全然ダメ全然ダメ、全然ダメだから。あの人と居るぐらいだったら一人のがいいもん。カーってなっちゃうから。「は？　テメなめてんのか？」とか、ね。すぐそんなんだから＝
トモ　えー。

ミワ　＝こないだなんか税務署でブチギレててどうしようかと思ったんだから。
トモ　税務署ねー。
ミワ　そんで、話聞いてるうちにあたしまで腹立って来ちゃって、「おかしくないですか？」なんて［いって、
トモ　［お前もかい。や、止めてやれってそういう時は。
ミワ　（哀願調で）だからお願いだよー。ちょっと、なんか、ね。アレは、するから。埋め合わせ。的な。
トモ　いや、でも、――役に立たないって俺なんかいたって＝
ミワ　立つ立つ。めっちゃ立つ。
トモ　＝立たないよだって、塾のことなんも知らないし、今回の揉め事のことだってなんにも、

○三人

片桐コウジ、登場。
若い男。華奢である。スーツ姿。
部屋に入ってきて、トモローが居るのを見つけて驚いている。
トモロー、ミワも不意を付かれて驚いている。

片桐　ああ、――すみません、遅くなりまして、
ミワ　いえいえ。ちょうど今来たとこだから。
片桐　――（ミワに対してトモを示しつつ）そちら、の方は、あの？

トモロー、ミワ、目を合わせる。その後、

トモ　（開き直ってオープンに）どうもどうもー。お久しぶりっすー！
片桐　ああ、お久し、ぶり？
トモ　片桐さん。ね。あのー、ホラ、一回、お店の方来てもらっちゃって。
ミワ　そうそう。あのホラ、あったでしょ？　たこ焼き屋さん。個室の。
片桐　ああ、個室の？　（思い出して）たこ焼き。［ああ。
ミワ　［そうそうそう。店長さん。
トモ　どうもっす。その節は。（お茶を差し出し）あ、飲みます？
片桐　ああ。（受け取り）――ど、どうも。
ミワ　今日はちょっとさ、たまたま時間空いてるっていうんでお越しいただいて。いろいろ、ご意見伺っちゃおうかな、なんて。

間。

片桐　え、三人、で、話すってことですか？
ミワ　の、方がいいかなあ、と思って＝
片桐　＝ええ？
ミワ　――ダメだったかな？
片桐　いやいや、別にダメとかじゃないですけど＝
ミワ　＝ならよかった。（トモに）ね。
トモ　おお。
片桐　や、まあ、うーん。全然、良くも無いんですけど。
ミワ　どうしても、っていうんだったらお引取りいただいても――、なんだけど＝
片桐　＝はい＝
ミワ　＝ま、でも、せっかく来ていただいたし？
片桐　え、え、どういうことですか？
ミワ　あんまりこう、ね。ふたりだけで話してヒートアップしちゃってもなんだな、と思って。
片桐　しませんよ。ヒートアップなんて。
ミワ　いや、あたしが。あたしがね。片桐くんはそんなこと無いと思うんだけど、あたしがあんま熱くなっちゃってもいけないし、そう！　パワハラ、っていうか一応ね、（身振りをし）上司と部下、なわけだから、密室でふたりきり、っていうのもいけないかな、と思って。男女ふたりきり、でもあるわけだし。
片桐　んー、――まあ、じゃあ、ご配慮いただいたっていうことですかね？
ミワ　まあまあまあ、そういう感じ。も、あって。ご配慮、っていうほどのことじゃないんだけども。うん。

間。

※グラスなどを持ってくる？

片桐　（トモを示しミワに）え・やっぱり、お引取りいただいた方が良くないですか？　生徒さんのこともありますし、
ミワ　あー、
トモ　あるよね。それは。わかるわかる。それは、ある。
片桐　――ノリもしんどいですし。
トモ　しんどいっていうなよ！　俺のがしんどいんだからよっぽど。この、状況！
片桐　すみません。
ミワ　もう、でも、軽く、内容についてはお知らせしてあるし、そういう意味でも、
片桐　えっ？　話したんですか？　こんな、部外者の方に？
ミワ　や、そんなディープな話はしてないよ？　だって、大筋のことはもう、プチ炎上しちゃってんだから広く知られてはいるわけだし、
トモ　まあまあ、軽く拝見［させてもらっては――。

片桐　［いやいやいや、（ダメでしょそんな）
ミワ　だから友人として？　いつも問題があった時は相談に乗ってもらってるから。そう、だからホラ、妊活してた時とかもずっとそうだったし、
トモ　まあまあ、ありましたな。そういうことも。
片桐　いや、それとこれとは／だって、妊活のご相談は結構ですけどね。それはだって、冨永さんのプライベートな話なわけですから、それに関しては僕は関知いたしませんけれども＝
ミワ　＝ありがとう＝
片桐　＝でも、今回の件は生徒さんの、――それも結構、ナーバスな話というか、繊細な問題なわけじゃないですか？
ミワ　それに、――社員が一人辞めるかどうか、っていう話でもあるしね。
片桐　そうですよ、だから、
ミワ　だからこそ冷静に判断したいわけ。塾の内部の論理だけじゃなくて、冷静に。客観的な意見を言ってくれる人がいたほうがいいと思うし。この人は絶対に外で噂話するような人じゃないから。だって、そんなことやってたら客商売はできないでしょ？　ね。だから、大丈夫。
片桐　んー、じゃあ、まあ。

トモロー、口にバッテンマークなどを作って、口が硬い人物であることをアピールしている。

片桐、しぶしぶ受け入れる。

ミワ　だから、簡単に言うとあれだよね、片桐くんはあの、木村先生を辞めさせたいというか。
片桐　当然ですよ。――それはだって、当たり前じゃないですか？
ミワ　んー、そうかな？
片桐　そういうとこですよ、だから。（やはり片桐が気になり）うーん――。え、い、いいんですよね、この方がいても？
ミワ　どうぞどうぞ。
片桐　正直僕は、――冨永さんの責任も大きいと思ってますよ。
ミワ　あたし？
片桐　だって、――揉み消しっていうか、［庇おうとしたのかなんなのか知りませんけど＝
ミワ　［揉み消してなんかいないでしょ、
片桐　＝とにかく庇おうとしているわけじゃないですか、今も？　冨永さんのそういう、管理責任ていうのも軽くないと思いますけどね、僕は＝
トモ　＝つまりその――。

一拍。

トモ　簡単に言うと、木村先生、――が、まあ、ちょっとその、女生徒さん、に、こう、ね。
　なんというか、ハラスメント的なことをした、と。
片桐　そうですね。セクハラです。
トモ　ど、どういうアレなんですかね？　その、内容としては、

一拍。

片桐　言えっていうんですかそれを？　今、ここで？
トモ　差し支えなければ。
片桐　いや、差し支えますよ。差し支えるに決まってんじゃないですか！　プライバシーに関わることですし、
トモ　だよね・だよね。そりゃあ、そうか。
ミワ　や・でもさー、もう一回、確認させてもらってもいい？
片桐　は？　どうしてですか？
ミワ　なんか、どうもさ。んー。――いや、私の感覚がおかしいのかもしれないんだけどね＝
片桐　＝はい。
ミワ　なんか話を聞いてるとさ、結構こう、――んー、問題の本質が、どこにあるのか、っていうか、そうそう。問題の本質をさ、どの辺だと考えるか、っていうのが、あたしと片桐くんの間でもズレちゃってるのかな、と思うんだよね。
片桐　そんな難しい話ですかね？　明らかじゃないですか。
ミワ　★いや、明らかだと思うかもしれないんだけど、片桐くんにとっては、ね＝
片桐　はい。明らかです。
ミワ　＝でも・でも・でも、木村くんはこれで辞めることになっちゃうかもしれないわけじゃない？　あなたは、ね、そう主張しているわけだから、彼の人生にも関わる問題なわけだし、
片桐　本当だったら普通に警察案件だと思いますけどね、個人的には。
トモ　あー、そう？
片桐　（トモに）はい。解雇で済ませてあげるならそれでも大分甘い、というか、（ミワに）木村先生には優しすぎるぐらいの対応だと思いますよ。というかむしろそこですね、僕が悩んでいるのは。そんなに甘いことでいいのかな、って。ネットでも話題になってしまって、他の生徒さんや保護者の方々にも不安が広がってしまっているわけですし、
ミワ　あなたが書いたからね。ネットのことは、だって。

間。

片桐　じゃあ、黙ってろっていうんですか？　一緒になって黙って、それで、揉み消しを手伝えっていうんですか？
ミワ　そうじゃなくて、や、そんなことは言ってないじゃん、
片桐　★そう聞こえましたけど？　え？　それ以外の解釈が成立するんですか、今の発言？

ミワ　や、私は、――とにかく、解雇には反対。だから。

一拍。

片桐　おかしいです、ってそれは。

ミワ　だってそんな、んー、そんなオオゴトにするような話じゃないと思うんだよね。木村先生ってだって評判もずっといいわけだしさ、事実いい先生だと思うしね、あたしは。

片桐　出た出た出た。

ミワ　ごめんこれは、――片桐くんにとっては言うまでもない、っていう話なのかもしれないんだけどね、でも、片桐くんとちゃんと話し合うためにも、［もう一回、事実の確認からさせてほしいんだ、

片桐　［あの、あの、いいですか、すみませんあの、――片桐くん、っていうの辞めてもらえませんか？

一拍。

片桐　「さん」、「さん」で統一するっていう話になってませんでしたっけ？　内規では。

ミワ　――すみません＝

片桐　＝いえいえ。細かいことといって恐縮なんですけど。

トモ　まあ、俺としてもできれば、あのー、もう一回、確認させてもらえるとありがたいというか。何が片桐さんにとってそんなに許せない話だったのかな、って。

間。

ふいに片桐、笑い出す。つられてミワも笑い、

ミワ　なに？（笑）

片桐　（笑いながら）いや、すみませんなんか、――ああ、いるんだなホント。今もこんなコンプライアンス意識低いままでやってる方って、ええー、マジかよ、みたいな、そういう感覚になってちょっと笑えて来ちゃって、や、ごめんなさいなんか失礼な感じになっちゃって。

ミワ　（挑むように）おかしくないですか、その態度？　はいはい、悪かったですね、［そういうダメな経営者でさ、

トモ　［おうおうおう。早い早い早い。沸点が――うんうんうん。

トモロー、ミワを宥める。

ミワ、なんとか自制する。

片桐、以下のやりとりのどこかから、カバンを探し、資料の準備を始める。

トモ　（ミワに）まだまだ、全然。まだ、ね。うんうん。落ち着いて落ち着いて。（片桐に）
　あの、ご飯食べましたもう？
片桐　ご飯？
トモ　あのー、夕飯ていうか、
片桐　や、――まだ、ですけど。
トモ　お腹空いちゃいましたよね？
片桐　や、別に、僕はそんな、
トモ　こういう話はね、空腹でやっちゃダメなんですよ。や、自分がたこ焼き屋やってるから
　言うわけじゃないですけど、でも、思うんですよねやっぱ、難しい話題の時こそ、ちゃんとお
　いしいもの食べて、――っていう状態じゃないと、なんか、無駄にね。話がこじれちゃうとい
　うか。

　一拍。

片桐　（同意しつつ無視して）かもしんないですね。それは。

　トモロー、持参の荷物からたこ焼き器を出そうとする。
　ミワ、それに気づいて、無言で制止する。

○事件のあらまし

　片桐、資料の準備を終え、

片桐　間違いがあっちゃいけないんで、ひとつづつ確認しながらいこうと思うんですけど。
ミワ　どうぞどうぞ。
トモ　助かります。
片桐　（トモに）ああ、あの、お名前、伺ってませんでしたよね？
トモ　ああ、俺？　は、あの、ゆきずりの、――旅する料理人、
ミワ　★川島トモローさん。
片桐　川島さん。
トモ　まあまあ、だいたい、トモローさんとか。トモローちゃんとか。
片桐　――居るんですね。トモロウさんて。
トモ　はい？
片桐　いや、映画によく出てるあの人だけかと思ってたんで、
ミワ　そりゃいるでしょ。だって、まるこのあの、おじいちゃんだって、
トモ　それトモゾウね。俺、トモロウ。
ミワ　――おおよそ、トモゾウじゃん＝
トモ　＝違うだろ。「心の俳句」じゃねえんだよ。

片桐　じゃあ、トモロウさんにも確認していただいて、と思うんですけど、まず、前提としてこの事件が起こったのは授業中です。もちろん、授業時間じゃなければ良かった、とか、そういうことじゃないんですけど、

一拍。

片桐は以下も断続的に資料を読みながら話を進める、

片桐　完全個別指導という塾の特性上、授業時間は個室で二人きりになっていたわけなんですが、そこで、木村先生と生徒さんとの間で次のようなやりとりがあった、と。あくまでこれは生徒さんからの聞き取りによって得られた情報ではあるんですが、内容については木村先生も、まあ、ごちゃごちゃ言ってましたけど、大筋では間違いないということでお認めになっておられます。

一拍。

片桐　まず、生徒さんの方から木村先生の筋肉、とりわけ、大胸筋、僧帽筋の発達を褒めるような発言があったそうです。

トモ　大胸筋。僧帽筋。

片桐　はい。これはごく軽い調子で、筋肉すごいですねー、といったような他愛もない、些細な発言だったそうなんですが、それに対して木村先生の方から、「触ってみるか？」と。――これ、木村先生の方からですよ？　筋肉を指して「触ってみるか？」という発言があり、その後、生徒さんとしては疑問を感じつつも、自分から言いだした話題だということもあって断り切れず、嫌々ながら筋肉を触る、まあ、強制的に触らされる、という行為が断続的に続いてしまった、と。

トモ　んー。なるほど。

片桐　まさしく望まない身体接触ですよ。まあ、望もうが望むまいが身体接触という時点で完全にアウトなんですが、――しかも、こういった行為が五分から十分ほども続いた、ということなんですね。（資料を見て）えー、実際に話を聞いたところによりますと、――まず、大胸筋への接触。この際には、左右の筋肉が別々に動く、ピクピクと筋肉を動かしてですね、「赤上げて、白あげて」なんていう言葉に合わせて、威圧的に触らせていたそうなんですね。

トモ　威圧的？

片桐　そうです！　威圧的に。続きまして、僧帽筋！　それに加えまして三角筋！　さらに続きまして、上腕二頭筋、上腕三頭筋、そして広背筋！　あげくの果てには腹筋群への接触までさせていた、と――。しかも！　しかもですよ？　途中で木村先生はジャケットを脱いでシャツ姿になり、さらに、シャツのボタンをひとつふたつ外すなどして、シャツの中に生徒さんの手を入れさせ、木村先生の肌に直接触らせるという、まったくもって言語道断な、教育指導からは大きく逸脱した行為が見られたそうなんです。

一拍。

片桐　生徒さんとしてはその場では強い恐怖感から断ることもできず、――当然ですよ。時折は笑顔を見せるなどしていたそうなんですが、これはもちろん、どうしようもなく、ですよ。恐怖心からそういう、その場を取り繕うための笑顔なども見せつつですが、とにかく、そういう地獄のような時間を過ごすことになってしまった。

トモ　はい、はい、はい。

片桐　それで生徒さんは授業時間の間には何も言い出すことは出来なかったわけですが、――もちろん、怖いですからね。それで、帰宅後になってようやくそのことをお母様にお話になってくださって、お母様の方でご懸念を抱かれまして、「娘からこういう話を聞いたんですけど、本当なんですか？」という、お問い合わせをいただいたことでようやくこのことが問題化した、と。――事実としてはそういう酷いことが起こってしまったわけです。

片桐、見ていた資料を閉じる。

片桐　生徒さんが安心して勉強できると思っていた空間で、このような、到底許されるはずもない猥褻行為が行われてしまったわけです。これは、重大に受け止めなければいけませんよ。わかりますよね、冨永さんも？

ミワ　そうだね、まあ、

片桐　もう、これ以上なにか付け加える必要ありますかね？　最低でも解雇、んー、というか、最低でも警察案件としなければいけないのかな、とそこが悩んでいるところではありますし、むしろ、うちの塾全体をもう閉鎖すべきなんじゃないか、とも思ってまして。

トモ　ええ？

ミワ　塾全体？

片桐　――事実を最大限に重く受け止めるのであれば、ですね、徹底した調査は継続しつつも、当面の授業はすべて中止として、新規の生徒募集も中止。近い将来に塾の閉鎖を目指しつつ、あとは事件の処理に関してだけは責任を持って行う、と。そういった対処を取るべきなんじゃないですかね？　少なくとも抜本的な改革をするまでは、どうして保護者のみなさんが大切に育てていらっしゃるお子さんをお預かりすることができるんでしょうか？

トモ　まあ、まあまあ、まあ。――大体、そういう、あ、（ミワに）あらましとしては大体、そういうことでいいのかね？

ミワ　いや、――んー、違う、とこもいっぱいあるけど。

トモ　ああ、そう？

片桐　どこがですか？

ミワ　いや、どこっていうか、

一拍。

ミワ　ちょっと一遍にいろんなことをあんまり言うから――。うーん。いや、そうか。そこ／うーん。――いや、ごめんなさい、正直その、あー、塾、全体を閉鎖する、という、んー。そこまでは全然、考えていなかったので、

片桐　当然じゃないですか。選択肢のひとつとしては、

ミワ　いや、まあ、片桐くんのご意見はわかったんだけどね、あのー、

片桐　さん。

ミワ　――はい。片桐さん、の、ご意見はわかったんですけど。んー。ちょっ、ちょっとあたしの聞いてる話とは違う部分もあったりして、

片桐　だから、どこがですか？　って。

ミワ　いや、あのー、いろいろ、あるんだけど、

片桐　（座って）いいですよ。ひとつづつやっていきましょうよ＝

ミワ　＝わかったわかった。うーん。ちょっと待って、あたしもね。――もちろん、女として生きてきたから全然、片桐さんよりもそういう、――なんだろう、そういう、暴力的な行為に曝される恐怖感とか、――怖いな、断れないな、っていう感覚は、わかっているつもりなのね。

片桐　はい。

ミワ　力がさ、もう全然違うんだからそれは男の人とは、や、もちろん男の人が被害者になる場合だってあると思うんだけどね、でも、――そういう、圧倒的な力の差がある状況で、権力関係もあるわけだし、――それも密室に近いような環境で、っていうことの怖さはわかってるつもりなの。そういう、んー。私もそういう、今まで生きてきた中でそういう嫌な思いをしたことがあるし、何度もね。だから、そういう体験もあるからすごく、――重く、考えなくちゃいけない問題だっていうことには全然、賛成なんだけど。でも、うーん。

一拍。

ミワ　いや、塾全体を、っていうのは。ちょっと。いや、片桐さんも悪い気持ちで言ってないことは十分ね、わかってはいるんだけど、うん＝

片桐　＝なんですか・なんですか？＝

ミワ　＝でも、うーん。片桐さん今、三年目とかだよね？

片桐　そうですね。丸三年いさせてもらってるんで、今、四年目というか、

ミワ　まあまあ、まあ、それぐらいなわけじゃん。あたしはさ、十二年、かけてうちの塾をなに、うーん。育ててきたっていうか、自分でやってきたから。

片桐　はい。

ミワ　なんか、いや、わかるんだけど。確かに全室もっとオープンな形の、パーテーションとかにして、少なくとも密室にならないような環境を整えなきゃいけないとは思っていて、進めてはいて、だからそれが完全には間に合ってない、っていうのは、あたしの責任だよ。わかるよ。わかるんだけど、でも、なんか勝手に、――うーん。いや、勝手、っていっちゃいけないのかもしれないけど、――簡単なことじゃなかったから。ここまで塾を運営してくる、ってい

うことはね。全然、簡単なことじゃなかったから・だから、――なんか、塾の閉鎖とかっていうのは、いや、それは片桐さんが言うことなの？　っていう、思いは正直持っちゃってて、
今、
片桐　いや、別にどうしても潰せとかそんな話してるわけじゃないですよ。そりゃ僕だって困りますしね、［ここが潰れちゃったら、
ミワ　［いやいやいや、あの、――さ。無神経過ぎるでしょ。

一拍。

ミワ　いや、あのー、わかるよ。被害者のね、その、生徒さんが傷ついている、っていう状況の中であたしが被害者です、じゃないのはわかってるんだけど・それはもう、十分わかってはいるんだけど、でも、うちの塾を潰すとかそういう単語がポンポン・ポンポン飛び交うような状態であたしは冷静に話はできない。――ごめん＝
トモ　＝一回あの、――わかった、じゃあ、ね。ちょっと休憩というか、ブレイク、――ブレイクってことにしませんか？
ミワ　うん。ちょっとあたしもお手洗い行かせてもらって、
トモ　ね。そうしよう。（片桐に）よろしい、ですかね？
片桐　まあ、僕は必要ないですけど、（ミワと目が合い）――いやでも、そちらがそうおっしゃるなら全然、
トモ　――ありがとう。ごめんなさいね。
片桐　いえいえ。

ミワ、退場。続いて少し遅れて、トモローが部屋から出る。
場面転換。

【2】休憩

○順を追って　トモローの語り　その2

会議室の場がいったん消滅し、冒頭のトモローのひとり語りの場に戻る。

トモ　（観客に）やあ、ホント、いい迷惑というか。キツイ。こういう――。ねえ？　どうします、みなさんだったら？　関係ねえもんなあ、俺、

間。

トモ　まあ、でも。この時点では正直、あの、――今にして思えば、なに考えてんの、って感じなんだけど、この時点では「あ、なんか俺がいてよかったのかな」じゃないけど、確かにこの、（身振りをして）ふたりだけだと全然、こう、落とし所が見つからないというか、どうにもなんなかったろうな、と思ってたんで。それに――あー、そうだ俺、ゲイなんですね、ゲイ。あの、突然でなんですけど（笑）。だから、なんていうか、こういう問題についても比較的、フラットな立場でいられるというか。いや、それは俺が勝手に思ってるだけかもしれないんだけど、だからなんだ、――完全に男の視点っていうでもなく、もちろん、女生徒さんの気持ちとか、そんなことは全然わかんないんだけど、（自分を指し）まあ、性自認は全然、男なんで。あ、だからこそ、ミワとも長年の友人というか、旦那さん公認の親友っていう絶妙な立場でいられてて。っていうのはあって。って、あれ、違うな。そういうことじゃなくて――。

一拍。

トモ　あ、この時点では、ね？　俺がいて良かったな、っていう。そういう気持ちだったっていう話で、そうそう。だから、あ！　そう、筋肉のね。あの、加害者の、木村先生？　の気持ちっていうのもね。まあー、わかる。筋肉、――筋肉、あるんですよ俺も。ある程度ですけど。だから鍛えてる側の人間の気持ちっていうか、あるある、っていうか、ちょっとわかるな、って思っちゃって。いや、いるのよ、実際。えー、触らせてー、みたいな。すごーい、みたいな。――断れないでしょう？　「やめろよ、触んなよ！」ってこれ、なかなか言えないんだよね。や、全然、断れる人もいると思うんだけど。それに、

一拍。

トモ　実際、自慢したいみたいなアレも多少はね？　違いますよ、あの、ホラホラ触ってみ、みたいなセクハラ的な筋肉自慢とか、そういうのは完全にアウトだと思うんだけど、でも、うーん。そういう自慢の誘惑、っていうか欲望っていうか、――なんだろう、鍛えてる人間だったらこう、大分、仕上がってきたな、っていう時にはね、――すごくない？　っていう。そう

いう自慢したい気持ちも、確かにあるし。だから、――んー。いや、わかんないけどね。実際に起きたことがそういう、――性暴力、というか、セクハラというか、そういうものだったのかもしれないし、そういう可能性は十分あるし、でも、うーん。なんか、リアルに、なんだろう。

一拍。

トモ　（思いついて）だからそう！　あのー、テーマパークとかにいって、わー、とかいって着ぐるみに抱きつく、みたいな感覚で？　グリーディングみたいな、筋肉もだから一種のテーマパークみたいなとこあるんで。――いや、あるんですよホントに。筋肉のメリーゴーランドみたいな。だからそういう無邪気な感覚で？　わー、っていう感覚で来る人もいるから、そう。それは男も女も一定数いるから、だから、わからん、と。ひょっとするとすごい平和な状態で？　ホントに、なんか、きゃっきゃっ言ってるだけの風景でそういう、筋肉を触りたい人と触らせたい人がいて、そんで家に帰ってから興奮醒めやらぬみたいな感じで、今日、あたしちょっと、すんごい筋肉を触らせてもらっちゃったんだけどさ、っていう、そういうノリで親御さんに話しちゃって。そんで勘違いされちゃって、「大胸筋？　僧帽筋？　これちょっと・どういうことなんですか！」みたいな？　そういう風景も割りとリアルに想像ついちゃうんだよなあ、っていう、ことがあって。

○トモローとミワ

ミワ、ここまでにトイレから出てきている。

ミワ　ごめんねなんか、
トモ　いやいや、いいんだけどね。

間。

ミワ　時間大丈夫？
トモ　あー、俺は別に。そっちこそ平気なの？　茜丸くんさ？
ミワ　まあまあ、それは旦那に頼んであるから。

間。

トモ　今、いくつんなったんだっけ？
ミワ　や、もうじき三歳。
トモ　あ、そう？　そんなんなる？　じゃあ、もうベラベラだ？
ミワ　そうだね。もう結構。

トモ　はー。早いねー。
ミワ　ねえ。

間。

トモ　まあ、あんま無理しないで。
ミワ　うん。
トモ　しんどかったらまた改めて、ってことでもいいと思うし。彼もちょっと、熱くなっちゃってるみたいだし、
ミワ　だよね？　言い過ぎてるでしょ。
トモ　うん。――そうだね。

間。

ミワ　え、ぶっちゃけさ。
トモ　うん。
ミワ　存続、できると思う？　塾。
トモ　あー、存続。
ミワ　まあ、いろいろ話し合いがこのあとあったとして、最終的に。まあ、木村くんが辞めるか辞めないかは別として、最大限、守ろうと思ったら守り切れるのかな？　塾。
トモ　――大丈夫だと思うよ。さすがに潰すっていうのは、
ミワ　だよね？
トモ　うん。ちょっと――いや、わかんないけど、多分、そこまでのことじゃあ、無いんじゃない？　とは思うから。え、だって、炎上も収まってはいるんでしょ、もう？
ミワ　んー、収まってる、っていうか、まだ、塾として公式にこの問題への対応っていうのを発表してないから＝
トモ　はいはい。
ミワ　＝今は静観してる状態っていうか。
トモ　なるほどね。
ミワ　だから、こっちの対応がマズかったら改めて燃え出す、っていうことも、ないわけじゃないと思うんだけど。
トモ　まあまあ、でも。対応を間違えなければ、ね。
ミワ　――うん。

間。

トモ　守りきれると思うよ。俺は。
ミワ　そう？

トモ　うん。だって、ずっと見てきたから。
ミワ　――？
トモ　結婚して、子供もいて。仕事も続けて、――というか、むしろ起業して、それを成功させて、なんてさ。まあ、言葉だけ聞けばトントン拍子で？　何もかもうまくいってるみたいに見えるかもしれないけど、その分、めちゃめちゃ――ねえ？
ミワ　――。
トモ　頑張ってきたわけじゃん。
ミワ　（無言で苦笑しつつ同意する）ねー。

一拍。

ミワ　ダメならダメでまた出直せばいっか。トモローみたいに借金して。
トモ　うるせーな。ちゃんと返済できてんだろ？　順調に。
ミワ　はいはい。今度はあたしがトモローに融資してもらって？
トモ　んー、まあ、条件によっては（融資）しないわけじゃないよ。
ミワ　フフ。頼りにしとくわ。

ミワ、退場、続いてトモロー、退場。
ふたり、部屋に戻る。

【3】決戦

○責任の取り方

ふたり、部屋に戻ってくると、片桐は立ってそれを迎える。

片桐　ああ、奥、どうぞ。僕が上座っていうのもあれなんで、

ミワ　ああ、や、よかったんだけどねそんな、

片桐　（席を勧めて）いやいや！　どうぞどうぞ。

ミワがトモローに上座を勧めて、

トモ　じゃあ・じゃあ。

三人、改めて椅子に座る。

間。

片桐　あの、考えたんですけどね、僕。

一拍。

片桐　そりゃあの、――冨永さんが今まで頑張って来られたっていうのはよくわかってるんですよ。十二年。――僕には全然わからないですし、冨永さんが頑張ってこられたおかげで僕だって今、こういう形で勤務させていただいて、――好きですからね、僕もうちの塾。だから本当に無くなってほしくないな、ってこれはあの、これは本当に思ってますし＝

ミワ　＝うんうん。

片桐　だから、僕がそういう風に、大切なものだな、って思える塾を冨永さんが作ってくださった。その事実。それは本当にありがとうございます、って。感謝しているんですよ。でも、――でもですね。

間。

片桐　今、こういう状況がある、と。それも、やっぱり重く考えなくちゃいけないとも思うわけですよ。やっぱり僕もね、――自分でもなんか、偉そうに人権とか道徳とか教えている立場でもあるわけじゃないですか？　そしたら、イザ自分がこういう立場に立たされた時に、じゃあ実際に何ができるのか、どう行動するのか、っていうのはこれは、――逃げちゃいけない場面だな、と思っているわけですよ。

ミワ　で、なに？　――が、言いたいの？

片桐　いったん、あの、これ、――いったんの提案なんですけど、
ミワ　なに？
片桐　あのだから、――あくまでうちの塾を無くさないために、っていう観点で提案させてもらいたいんですけど、――冨永さん、が、お辞めになる。っていうのは――いかがでしょう？

間。

ミワ　塾は残して？
片桐　そうです。塾は残して。

間。

ミワ　木村先生は？
片桐　もちろん、木村先生は退職していただくしかないと思うんですけど。それは。

片桐、立ち上がり、少しだけミワから離れて、

片桐　それしかないと思うんです。木村先生の退職。それで、冨永さんにもやっぱり管理責任があるわけですから、「ハイ、ごめんなさい、でも続けますよ」ってわけにはいかないじゃないですか？

間。

片桐　本当にこれは、――僕が言うことじゃないと思いますし、この提案も失礼だな、っていう自覚はあるんです。冨永さんの今までの功績とか、努力とかっていうのは全然、否定するつもりは全然、ないんですけど、でも、――だからこそっていうか、この、まあ、いい塾だと思ってますから、僕も。残すためにも。残したいんですよ。だから、――やっぱり苦しいですけど、うーん。そうするしか無いのかな、っていうか。はい。――思う、んですよね。

間。

ミワ　考えとく。
片桐　いやいや、考えとく、とかじゃなくて、
ミワ　（立ち上がり）とかじゃなくて、とかじゃなくて！　いや、無視するって言ってないじゃん。考えとくっていってんじゃん。ちゃんと。考えるから。

間。

ミワ　あたしも、――一応、人生を賭けてやってきたつもりだし。はい、そうですね、はい、辞めましょう、ってそんな軽い話ではないから。――ムカついてもいるしね、いま。流石にね。
トモ　ムカついちゃダメよ、そういう。――うん。ムカつくのは（首を横に振る）。

ミワ、なだめるトモに対して「わかっている」とでも言うように制して、着席する。

○逆襲のミワ

ミワ　さっきのあの、整理してくれた話なんだけどね。
片桐　はい。
ミワ　――あたしが聞いてたのとはちょっと違うところもあって。
片桐　［（肯定の意味で）ええ。
トモ　［ああ、なんか言ってたね。

ミワ、片桐に着席するように促す。
片桐、座る。

ミワ　まず、肌に直接は触ってない。
トモ　［ほー
片桐　［いやいやいや、それはでも、生徒さんが、
ミワ　ちょっ、聞いて聞いて。
片桐　はい。
ミワ　片桐さんもちょっとさあ、――一方的だよ。
片桐　（驚き）ええー？　僕がですか？＝
ミワ　＝うん。
片桐　滅茶苦茶気ィ遣って、ええー？　僕が一方的っていうことになっちゃうんですか？　それはだって、ええ？　僕が悪い、みたいな［話ですか？
ミワ　［言ってないじゃない、そんなことは、
片桐　でもいま、
ミワ　［そうじゃなくて、そうじゃなくて――。
トモ　［はい、はい、はい、落ち着いて、落ち着いて、ね。ふたりとも。（片桐に）いったん、聞きましょうよ・ひとしきり。

一拍。

トモ　（ミワに）で、なに？　ミワが聞いたところによると？

ミワ　や、あたしが聞いたのはだから、――木村先生からの話だから、そりゃあ、まあ、自分に有利なようにしゃべってるのかもしれないけど＝
片桐　＝そうですね。
ミワ　でも、まあ、彼の話もそうだし、あと、――まあ、一応、あたしも直接ハルちゃん、ていうか古川さんともお話をして、
片桐　★（驚いて）名前出さない方がいいと思いますけど。
ミワ　やあ、ごめんごめん。
片桐　（なんで名前出しちゃうのかな）あーあ。
ミワ　でも、本人に直接聞いて、まあ、ちょっとこの、うーん。なんだろう、本人もこういう、騒動にはびっくりしちゃっているというか、そういう気持ちもあるみたいで、
片桐　そりゃそうでしょう。だからこそ守ってあげなくちゃいけないわけじゃないですか。僕たちが。被害者を。
ミワ　うん。そう。――そうだと思う。
片桐　でしょ？
ミワ　うん。それはホントにそうだと思うんだけど、

間。

ミワ　だけど、――生徒さんも別に、木村先生の解雇みたいな、そういうことは望んでいないとは言ってたし、
片桐　や・だから、それはそう言うに決まってる［じゃないですか、
ミワ　［生徒さんも！　生徒さんもだから、肌に直接は触ってないっていってたし、
片桐　（疑って）ええ？
トモ　あ、そうなの？　それは大分話変わってくるような気もするけど、
ミワ　それにジャケットも、そう、ジャケットもさっき片桐さんが言ってたみたいな、そういう流れの中で脱いだっていうんじゃなくて、授業の最初から脱いでた、っていう風にあたしは聞いてるし、
トモ　［あー、へー？
片桐　［んー。
ミワ　そうなの。それでだから、ボタン？　ボタンに関してもだから、――触らせるためとか、じゃなくて、最初からいくつか外してたっていうだけみたいだし、だから、肌に直接は触ってなくて、それにあの、――まあ、筋肉に関してはまあ、生徒さんの方も、正直興味はあったというか、
トモ　あー。
ミワ　そうそう、だから、んー、ちょっ・ちょっと、適切な表現じゃないのかもしれないんだけど、フェチ？＝
片桐　＝フェチ？＝
トモ　＝フェチ。

ミワ　筋肉は好き、っていうことは、あの、言ってて、本人も。
トモ　はいはいはい。
ミワ　だから、最初に触るとか触らないとかっていう話をしたのは、生徒さんの方だとも聞いてるのね、
片桐　（疑って）え、誰からですか？
ミワ　それは木村先生にも、生徒さんからもそう聞いてて、
片桐　ホントですか？
ミワ　聞いてるの、あたしは。片桐さんの聞いた話とは違うのかもしれないけど＝
片桐　＝ええ＝
ミワ　＝でも、まずは生徒さんの方から「え、ちょっと触らせてもらってもいいですか？」っていう、まあ、そういう意味の発言がなにかしらあって、それで、そういう発言があったから、木村先生はそれに答える形で「触ってみる？」という発言をした、って。
片桐　まあ、確かに木村さんは僕にもそう言ってましたよ。でも、生徒さんは、――うーん。少なくとも僕にはそういう話は、え？　それ言わせたんじゃないんですか？　冨永さんが、
ミワ　いやいや、言わせたとかじゃなくて。それはホントに。
片桐　どうだろう？　十分考えられることですよ。冨永さんが木村先生を守りたくて、塾を守りたくて、揉み消したくて、それを言わせたんじゃないんですか？　塾に有利になる発言を？
ミワ　いや、そういうことじゃないって、
片桐　被害者の生徒さんに圧力をかけて、言わせたんじゃないんですか？
ミワ　そんなことといったら、――じゃあ、そんなね、あたしが彼女に勝手なことを言わせられるんだとしたらだよ？　そんなこと出来るんだったら片桐さんが言わせることだって出来るわけだよね？　塾を潰すために、オオゴトにして、炎上させて、大問題にするために、
片桐　なんのためにそんなことするんですか？
ミワ　あたしが聞きたいよ。なんのためにそんなことをするの？
片桐　――僕はただ、生徒さんのために事実をはっきりさせたいだけですし、――冨永さんの方がよっぽど一方的じゃないですか。

間。

片桐　じゃあ、仮にですよ？　まあ、百歩というか、千歩ぐらい譲って仮に、生徒さんの方から触りたいと言ったとしましょうか。――え？　だったら、いいんですか？　生徒さんが興味持ったら触らせていいんですか、筋肉？　「触りたーい」「じゃあ、触ってみる？」って、いいんですかこのやりとり？
ミワ　よくないよ。［よくないけど、
片桐　［ですよね。いいわけないですよね？
ミワ　まあ、そう、そうだけど。
片桐　考えてみてくださいよ、冨永さんがじゃあ、ね。まあ、生徒さんが、なんか、じゃあ、おっぱいが好きだ、と。

ミワ　は？
トモ　おっぱい。
片桐　仮にですよ、そういう生徒さんがいて、おっぱいに興味持ってるんだから触らせてあげようか、って、そういうことでいいんですか？　同意があったよね・よかったよね、っていうことになりますか？　成立するんですか、そういうことが？
ミワ　いやいやいや、成立はしないよ、それは全然、
片桐　するわけないですよね。
ミワ　や・だから、――んー、全然あたしも、木村先生が正しかったとか言うつもりはなくて、
片桐　はい。
ミワ　そう、だからダメだったっていうか、間違えていた部分は確かにあるし、
片桐　ですよね？
ミワ　あるよ。そりゃ間違えてた。不適切だったと思うし、許されないよ。
片桐　それ木村先生のファンタジーなんじゃないですか？　悪質なレイプ・ファンタジーですよ。
トモ　レ・レイプ？
片桐　や、だからそういう用語ですよ。自分からそういう猥褻な行為をしておいてですよ？　痴漢とかが自分で勝手に痴漢をしておいて、それで勝手に被害者の側が、触ってもらいたかったんじゃないか、とか。そういう、ものすごく勝手な妄想を抱くことを、レイプ・ファンタジーっていったりするんですよ。
トモ　ああ、――なるほど。
片桐　木村先生もね、――だから勝手にそういう、被害者の側もそれを望んでいた、っていう風に、自分の汚らしい欲望を被害者の側に投影して、それで自分の罪悪感を軽くする、被害者が望んでいたんだ、だから俺は悪くないんだ、っていう、そういう妄想の中でしゃべっているんじゃないですか？　これはね、こういう問題を考える時のごくごく基本的な考え方ですよ。
ミワ　当然、考えてます。そんなことは。

間。

ミワ　教えていただかなくても結構です。当然、考えてますよ、それぐらいのことは。何年やってきてると思っているんですか。
片桐　や、じゃあ、――まあ、良かったですけど。
ミワ　それと生徒さんがいってたことであたしが心配しているのは、片桐先生のことです。
片桐　はい？　僕がなんですか？

間。

トモ　ん？　ど、どういう――？

ミワ　あたしもだから、――女同士だからいろいろ腹割って話そうよ、みたいなね。そういうテンションで話すのが却って彼女にとっては暴力的に作用してしまうんじゃないか、とか、そういうことも考えてますから、慎重に話をしましたけどね。その中で、そう、これはまずはっきりさせておきたいんですけど、――別に生徒さんが木村先生に対して特別の感情を抱いてわけじゃない、って。好きだったとか、そういう感情は全く無くて、純粋にフェチ？

トモ　純粋にフェチ。

ミワ　ただ、ただ筋肉に興味があっただけだ、っていうことは、これは聞いてます。だから、彼女がヘンな、――んー、木村先生に対して恋愛感情を抱いていたとか、そういった事実はありません。全く。

片桐　――でしょうね。

ミワ　むしろ、――少しちょっと、困っていることがあるとすれば、片桐先生が少し、そういう恋愛感情みたいなものを自分に向けている気がする、と。

トモ　ほう――。

トモロー、片桐を見る。

片桐　（ショックを受けて）いやいやいやいや――。

一拍。

片桐　ええ――。

一拍。

片桐　いや、――ええ？　それ、ええ？　彼女がそういったんですか？

ミワ　言わせたんじゃないですよ、別に。

片桐　いや、――ええ。

間。

ミワ　別にこれも、彼女が被害を訴えてた、とかそういうことじゃないですよ。片桐さんに対してもだから、処罰感情みたいなものは全然ないっていうことでしたし、

片桐　や、僕ですか？　それは、――ええ。

ミワ　だけど、えーと、なんでしたっけ、――クオッカ？

トモ　クオッカ？

ミワ　（トモローに）ていう、なんか、にっこり笑ったハムスターみたいな？　クオッカ、っていうリスみたいな小動物がいるらしいんだけど＝

トモ　＝ほうほう。

ミワ　（片桐に）それのあの、キーホルダーというか？　小さなぬいぐるみ・みたいなものをもらった、って生徒さんが言ってて。
トモ　ああ、個人的なプレゼント、というか、
ミワ　［そうねえ。
片桐　［いや、それは違いますよ。それはだから、――以前に、クオッカが好きでー、みたいな話があったから、それでたまたま僕がその、クオッカのキーホルダーを手にする機会があったから、おみあげ、というか、動物園に行った時の、や、まあ、もちろんそれでも、個人的な、そういうのは良くないとは思うんですけど、
ミワ　それに、「魅力的な女性になれる」って。――最初は別になんとも思ってなかったそうなんですけど、何回も言われる、って。「魅力的な女性になれるよ」とか、「魅力的な女性だよ」とか、「魅力的な」「魅力的な」「魅力的な」、何回も言われるって。

間。

ミワ　あと、なんか近いって。
片桐　近い？
ミワ　だから距離が。なんか、物理的な距離が、ちょっとだけ近い、って。
片桐　いや、それは気をつけてましたよ、［僕は、
ミワ　［（ゆっくり強く）近いと思う時があるって言ってるんだもん生徒さんが。
片桐　いや、それ、――んん。

間。

ミワ　別に被害とかじゃないですよ。これで、片桐先生に対して怒ってるとか、そういうことを言ってたわけじゃないです。でも、本当に困ってることないの？　って。本当になにか、嫌だなと感じたことあったら全部いってねって。なんでもいいから、どんな小さなことでもいいから全部いって、って言った時に、じゃあ、まあ、強いて言うなら、っていう中で出てきた話です。
トモ　（片桐に）ちなみにあの、――関係ないかもしんないんだけど、
片桐　――はい。
トモ　片桐先生はあの、パートナーというか、――お付き合いされてる方とかは、現在？
片桐　――いませんけど。
トモ　――あー。
片桐　え・え・え・え？　あー、ってなんですか？
トモ　いやいや、あー、は、あーだよ。別に。
片桐　いやいやいや、えー？　今の、「あー」はだって、その「あー」じゃないですか？　その「あー」でしょ、今のは。

トモ　なん、なんですか？　その「あー」って、なんですか？　なんも言ってないじゃないですか俺は。
片桐　いや、それは――。えー、それは失礼ですよ。だって、いや、――失礼ですよだって、彼女がいなかったらセクハラするんですか？　彼女がいないやつは、っていう、そういう理屈じゃないですか今のはだって。
トモ　いや、そんなこと言ってないんだけど、全然、
片桐　や、えー？　じゃあ・じゃあ、トモローさんはいるんですか、彼女？　トモローさんはどうなんですか？
トモ　いや、いないけど、彼女なんか。いたことないけどね。
片桐　うーん？　や、居たことない、は、それはそれで嘘っぽいな。えー？　彼女いたことないんですか？　一度も？
トモ　はい。一度もないですよ、彼女は。
ミワ　ゲイなんで。

間。

片桐　――すみませんなんか。
トモ　や、謝るのも失礼だけどね。
ミワ　ねえ。今の「すみません」は、その「すみません」だよね。
片桐　いやいやいや、違いますよ！　誤解をしてしまってたみたいなんでそれはだから／あ
　あ、そうでしたか。誤解に対してのすみませんですよだから、
トモ　いいんだけどね、まあ、別に。
片桐　それだったら別に、じゃあ、――彼女はいないですよね。そりゃ。

間。

片桐　え？　これって、――え？

一拍

トモ　ん？　なに、どうかした？
片桐　（ゆっくり）辞めろってことですか？　僕が？
ミワ　言ってないでしょ。
トモ　うん。
片桐　や、でも、流れ、流れ的になんか今、そういう空気出してましたよね？
ミワ　出してないよ。勝手に決めないでよ。

片桐　いやいやいや、いいですよ。僕はね。――僕はいいですよ、辞めろっていうんだったら辞めますよ。というかね、あの、――別に最初から。だからさっき、冨永さんに辞めていただく、っていう話をした時からそれは、そういう覚悟はしてましたからね。

トモ　ああ、そういう覚悟を？

片桐　そりゃそうでしょう。だって、社長さんに辞めろって、そんな無茶苦茶なこといってるんですから、むしろこっちがクビ切られるんじゃないかな、っていうそんぐらいの覚悟はしてますよこっちだって。

トモ　んー。なるほど。じゃあ、まあ、――そうします？

片桐　いいですよそれで僕は＝

ミワ　＝違う違う違う。そういうことじゃなくて。

片桐　なんか、そういう。いやー、不本意ですよ。んー。だってこれは、すごく不本意ですね、僕がそういうセクハラをしたとか、そういう疑いをかけられて僕はそれはもう、やっていけませんよ。そんなこと言われちゃ、

トモ　でも、あなただって木村さんにはそういうことを言ってるわけじゃない？

ミワ　そうだよ。

片桐　それは実際にあったことだからですよ、

トモ　あー、――あなたは冤罪？

片桐　そりゃそうですよ。僕のは冤罪です。

トモ　――どうして（そう言い切れるの自分だけ）？

片桐　だって、近いなんてそんな、――めちゃくちゃ注意してましたもん、それは。ものすごい気を遣ってたから、そういうことにだけは絶対ならないように、

ミワ　でも、そう言ってるんだもん生徒さんが。

間。

片桐　いや、そんな――。いませんよ。そりゃ、彼女はいません。だけど、じゃあ、彼女がいない人間はみんな寂しくて、みんなセクハラするんですか？

トモ　言ってない・言ってない。

片桐　そういうことじゃないですか、さっきの、「あー」はその「あー」ですよ。

トモ　わかった、それは俺が悪かったよ。もう「そのあー」の話は辞めようか、［いったん、］

片桐　［辞めません・辞めませんよ！　それはだって、絶対、失礼ですしね。いや、それにまあ、いや、わかりますよ、理屈は。そういう風に見られる自覚はありますよ。それに、こういうことは生徒さんがね、被害者の方がそういってるかどうか、っていうのが一番大切じゃないですか？　兄貴だってそういってましたしね、ずっと。

トモ　兄貴？　――というのは、

間。

片桐　僕の兄貴はセクハラで会社クビになってうつ病になって自殺してますから。

長い間。

片桐　自業自得だと思ってますよ。そんなの自分が好きで加害者になったわけですからね。それでクビになったからって兄貴が被害者ヅラするのとかはもう、全然筋違いの話だと思ってますし、それはもう、完全に自業自得ですよ。――むしろ迷惑ですよね、被害者にとっては。なんか、気分悪いですしね、勝手に加害者の都合で死なれたら気分悪いだけですからね。

ミワ　や、まあ――。それは場合に依ると思うけどね。そんな風には思わない被害者の方だって沢山いると思うし、

トモローー、立ち上がって、

トモ　ちなみに、――お兄さん、とは仲良かったの？

片桐　んー、それ、なんか関係あるんですか？

トモ　いや、興味で、――っていうか。いや、そういうのでお兄さん亡くしてるんだったら、ねえ。

片桐　――なんですか？

トモ　むしろそういう、逆の方向に傾くんじゃないかな、っていうか、

片桐　逆？　逆ってなんですか？

トモ　いや、だから、――お兄さんを守るじゃないけど、んー。なんだ、兄貴は悪くなかったんだ的な？　「世の中、セクハラ・セクハラ言いすぎやろー」みたいな考えになりそうなもんかなァ、と＝

片桐　＝なりませんよ。しょうがないじゃないですか、それは。だって悪いんですもん兄貴が。

トモ　ああ、そういう、はっきりした事件だったの？

片桐　事件っていうかだから、――んー。そんなはっきり、いや、人間としてどうとかは、わかんないですけど、でも、コンプライアンス的には・はっきりアウトだったと思ってますし、それは兄貴もそう認めてましたし、

トモ　なるほど。――でも、まあ、とはいえ、ねえ。こういう、なんだ。こういう種類の揉め事があんまりいい結果を生まないこともある、ってことも、わかってるわけじゃない？

片桐　ど、どういうことですか？

トモ　だからそんな、――命に関わるようなさ、そんな罪じゃないということはあったわけでしょう、お兄さんも？

片桐　兄貴のはだって、まあ、自分で死んだわけですからね。別にコンプライアンスに違反してそうなったっていうことじゃないですし、

トモ　でも、繋がってるわけじゃない？　片桐さんの中ではそれが。

片桐　そりゃまあ、繋がってはいますけど、――でも、罰を受けてそうなったわけじゃない。自分でそうしたっていうか、だから兄貴なりの、それは、責任の取り方ですよ。
トモ　――んー、だからあなたも会社ぐらい辞めて当然だ、と？
片桐　当たり前でしょう。
ミワ　いや、クビになんかしないから。

間。

ミワ　あたしは片桐くんをクビになんかしない。絶対にしないよ。――だって生徒さんも守らなくちゃいけないけど、先生を守るのもあたしの仕事だから。守るよ最後まで。

間。

ミワ　そりゃ、本当に片桐くんが悪いことしてたんだったらそれは怒るよ。最悪、クビを切ることだってあるのかもしれない。十二年やってきて誰もクビにしなかったわけじゃない。守りきれない時だってある。あったよ。だけど、――塾を作ってくれるのは、もちろん生徒さんが一番大事だけど、でも、いい先生がいなかったらいい塾は絶対作れないから。だからあたしは片桐くんを最大限守るし、木村くんも最大限守るんだよ。
片桐　勝手にやってください、それは。とにかく――僕はもう、絶対にこの塾は辞めます。

一拍。

トモ　まあ、そう言わずにさ。（ミワは片桐さんのことを）考えていってくれてるわけだから
＝
片桐　＝でも、ただでは辞めませんからね。絶対に木村先生は許しませんからね。そんなことは許されちゃいけないんですよ。僕も辞めますけど、木村先生も絶対に辞めさせます。それと！　それと、冨永さんも絶対に辞めさせます。絶対に絶対に辞めさせます。絶対に絶対に許しませんからね！
トモ　いや、まあ、落ち着けって。
片桐　落ち着いてますよ。いや、落ち着いていませんよ。だって落ち着いていられますか？僕は全然、生徒さんに対して恋愛感情なんて抱いてません！
トモ　わかったよ、わかった。
片桐　だけど、――だけど、そう思われたってことは事実ですからね。そう思わせたってことは事実ですからね。僕が、そうですよ。僕が加害者ですよ。僕がそう思わせたことは事実なんですからそれはもう、被害者がそういってるんだったらそれはしょうがないじゃないですか？そんな、近い、とか。そんな気持ち悪い感情で生徒さんを見たことは一度もありませんよ！
トモ　うんうんうん。［もうわかったよ、それは

片桐　［だけど、だけど、そう思わせてしまったんですからそれが、それだけが事実ですよ。いいですよ。わかりました。辞めましょう。だけど、――もっと酷いことをやったやつがいる。それに、そういうことが起こらないようにちゃんと管理できなかった人間がいる。なんでそいつらがみんな残ってて僕だけが辞めるんですか？　辞めるならみんな辞めないとおかしいでしょう？

ミワ　だから、みんな辞めなくていいじゃない。そんな、すぐに辞めるとか辞めないとかの話にするんじゃなくてさ、

トモ　そう［そうそう。

片桐　［（喰ってかかって）ああ、ああ、辞めないつもりなんですか、冨永さんは？　揉み消すつもりなんですか？　揉み消すつもりなんですね？

トモ　（片桐を止めて）やめよう・やめよう、

ミワ　（片桐に）ちゃんと話し合うよ。揉み消すつもりなんてはじめからないって［言ってるじゃないか。

片桐　［絶対に許しませんよ。そんなことは絶対にさせませんからね。

ミワ　生きて行くんだからさ。みんな、――こういうことがあったって生きていかなきゃいけないんだから、どうにかして乗り越えていかなくちゃいけないじゃない？

片桐　いいやー、そうですかね？

ミワ　そりゃあ、そうでしょう。

片桐　僕はそう思いません。――生きていかなくたっていいんですよ、そういう加害者は生きていかなくたっていいんです。気持ち悪い加害者は自業自得なんですから、被害者の方のことを最大限に考えるっていうんだったら生きていかなくたっていいんですよ。（ミワに）でも、あなたもですからね！　あなたもその気持ち悪い加害者の一員なんですからね！　忘れないでくださいよ！

トモ　――なにがしたいんだよお前は。

一拍。

ミワ　ちょっとごめん、あたし。

ミワ、退場。部屋にはトモと片桐だけが残る。

トモローー、ミワを追って移動しようとする、が止めて、残る。

間。

片桐　謝りませんからね。――このことに関しては、一言も謝りませんから。

トモ　何もいってねえだろ。

片桐　だって、――だって僕は何も間違ったことは言っていませんから。

トモ　おうおう。間違ってないよ。お前が、正しいよ。全部。

片桐　許されちゃいけないんですよ、こんなことは！　そうじゃなかったら誰が被害者を守るんですか？　そうじゃなかったら何のために兄貴は死んだんですか？　そうじゃなかったら、だって、そうじゃなかったら、ただの無駄死ににになっちゃうじゃないですか、

トモ　（片桐に歩み寄り）知らねえけど。お前の物語に俺らをつきあわせんな。

場面転換。
時間経過。

【4】抹消

○抹消

長い間。
ゆっくりとトモローが姿勢を変える。

トモ　満足いったか？　これで。

間。

トモ　潰れたよ。塾。

間。

トモ　なあ、満足いったんだろ？　これで？
片桐　ああ、満足ですよ！　大満足です！

間。

片桐　そう言わなきゃ許してくれないんでしょ？

間。

片桐　どうしろっていうんですか、じゃあ、僕に。
トモ　知らねえよ。てめえで考えろよそんなことは。
片桐　だからやめてくださいよそういう、てめえ、とか、そういう［言葉づかいは、
トモ　［うるせえな、てめえはてめえだろうがよ。
片桐　わかりますけど、そりゃ、トモローさんがしんどいのはわかりますけど、だけど、——
　僕のせいじゃないでしょう？
トモ　てめえのせい以外何があんだ・なめてんじゃねえぞこの——

トモロー、机を蹴る。

トモ　覚悟はできてんだろ、なあ？　わざわざ来てくれたってことはよ。
片桐　——何がですか。

トモ　俺はお前みたいのと違ってシンプルに考えてるからよ。――友達が一生懸命作ってきたもんを躊躇なくぶっ潰すようなやつに対しては、俺も躊躇しねえからな。誰が正しいとか、どっちが正しいとか。そんなの知ったこっちゃねえ。

間。

トモロー、立ち上がり、片桐に近づく。

トモロー、片桐の胸ぐらを掴んで立ち上がらせる。

片桐　や、やめてくださいよ。ちょっと。

トモ　やめなかったのはそっちだろうがよ。

トモロー、片桐を殴る動作のように大きく振りかぶり、殴る。

暗転。

幕

【参考文献】

情況　特集・キャンセルカルチャー
「差別はいけない」とみんな言うけれど　綿野恵太
欲望会議　性とポリコレの哲学　二村ヒトシ　千葉雅也　柴田英里
社会はなぜ左と右にわかれるのか　ジョナサン・ハイト
フェミニズムはみんなのもの　bell hooks
カール・シュミット　ナチスと例外状況の政治学　蔭山宏
「非モテ」からはじめる男性学　西井開
フリーターズフリー　vol.2
現代思想　202205　インターセクショナリティ
現代思想　フェミニズムの現在
現代思想　「加害者」を考える　臨床・司法・倫理
女ぎらい　ニッポンのミソジニー　上野千鶴子
男社会がしんどい　田房永子
ママだって、人間　田房永子
現代思想ガイドブック　ジュディス・バトラー　サラ・サリー／竹村和子訳
ジェンダー・トラブル　ジュディス・バトラー
道徳の系譜　フリードリヒ・ニーチェ
真のダイバー・シティを目指して　特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育　ダイアン・J・グッドマン著
当事者は嘘をつく　小松原織香